

12回連載 エッセイ 第9話 「ケアレスでもミスはミス」

徒然なるまゝ



安永暢男（元東海大学教授）

若い時に聴力を失いながら数々のクラシック音楽を作曲して「現代のベートーベン」ともてはやされて来た男性が、実は別の専門家に18年にも渡って作曲を依頼していたとの疑惑が表面化して話題になった。広島生まれの被爆二世という触れ込みも手伝ってか、発売したCDがクラシックとしては異例の売上げを記録していたという。“ゴーストライター”役を務めたホントーの作曲家の告白で明らかになったというからあきれた話である。しかも聴覚障害者2級の手帳を持ちながら実は全聾ではない、との証言まで飛び出しては哑然とするしかない。

偽造した医師免許を使って医療行為を行っていたという類の“なりすまし”騒動はときどき耳にするが、芸術家として成功を収めた有名人が実はニセモノだったという話は聞いたことがなかった。有名になってから既に何年も経つだろうに、よくもまあ今までバレずに来られたものと、むしろ感心してしまう。もてはやして来たマスコミも含めて周囲の関係者の姿勢も問われて然るべきかも知れない。先頃のソチオリンピックで、メダル候補とされたフィギアスケート選手がこのニセ作曲家の曲を使ったことも話題になったが、とんだトバッチリを受けたわけで、これが演技にも影を落としたとすれば気の毒としか言いようがない。

個人の個性や創造性の発露としての創作

活動においては、ゴーストライターもなりすましも勿論100%許されるものではない。複数人の共同制作であるならば、その旨を明示しさえすれば済む話であった。芸術家を詐称し、しかもそれによって名声や多大の経済的利益を得て来たとするれば、とんでもない詐欺行為ということにもなる。

虚偽も詐称も許されないのは何も芸術の世界に限った話でなく、科学技術の世界でも論文盗用とか他人のデータのパクリなどが明るみに出てマスコミを賑わすことがときどきある。バレても本人に対する世間や学会の評価が下がるくらいならば被害も少なく済むだろうが、何らかの実害を伴う場合もあるので怖い。例えばつい最近騒がれた話に、国のキモイリで推進されているアルツハイマー病研究プロジェクトにおけるデータ改ざん疑惑がある。厚労省に対してそれを指摘する内部告発があったのに、厚労省は敢えて告発と受け止めようとせず、こともあろうに告発された当のプロジェクト責任者にその告発メールを転送してしまったという。何十億円もの国家予算を注ぎ込むプロジェクトでデータ処理に不正があったとなればその影響は計り知れず、表沙汰にはしたくない、内々で処理したい、という身内意識が厚労省に働いた故の措置だったとすれば何とも薄気味悪い話である。

1年半ほど前にも、「iPS細胞から作った心筋細胞を重症の心不全患者に移植する世

界初の手術を米国で6件実施した」という虚偽の成果を公表した日本人研究者が話題になった。その限りでは、功名心を焦って出来もしない手術をしたと大ボラを吹いただけの話で、医療ミスをして被害者が出たといった悪質な事件とは異なるのだが、身分詐称や論文盗用、さらには関与したプロジェクトからの人件費詐取も疑われ…と単なる妄言話のレベルを超えてしまった。

これらの不祥事を見聞きするに付けいつも疑問に思うのは、本人を取り巻く家族を含めた当事者・関係者はコトが表沙汰になるまで本当に気が付かなかったのだろうか、ということである。気付いたときはもう後戻り出来ないところにまで来てしまっていたとか、本人との力関係から気付いても指摘や忠告のできる立場になかった、などそれなりの事情はあったにしても、当事者・関係者間に何らかの「相互にチェックし合う」仕組みが出来ていれば、いずれの不祥事も未然に防げたように思えて仕方がない。

話は変わるが、筆者は学会誌への投稿論文の査読や校閲作業に長年携わらせて頂いた。その際にしばしば気になったのは「共同研究者間における相互チェックの不足」である。送られて来た投稿論文の初稿原稿を通読して、「てにおは」を含めて正しい日本語表現になっていない文章、ひどい場合には日本語として意味の通じない文章にお目に掛かることが少なからずあった。図表における誤記や不適切な表記、といった初歩的なミスも結構多い。内容以前の問題で、注意深く書けば、さらにはもう一、二度丁寧に見直しさえすれば十分防げるレベルのいわゆるケアレスミスが結構多いのだ。このときに感じるのが、連名者たる共同研究者達は投稿前の原論文に自身でも目を通し

て中身を確認しているのだろうか、という素朴な疑問である。筆頭者が論文執筆に最大の責任を負うのは勿論としても、特に若手研究者の場合には意図せず単純ミスを犯す可能性も小さくはないだろう。その意味でも、連名者としての研究指導者や組織長には特に、内容だけでなく、文章表現の妥当性や正確性にも気を配ってチェックする責任がある筈と思うのだが、どうもそれが果たされていないように見えるケースが多い。“研究活動もチームプレー”という認識の下で、全員が「相互にチェックし合う」よう協力すれば、より信頼性の高い良質な論文に仕上がるのではないだろうか。

実はこのエッセー、自戒を込めつつここまで下書きを進めて来て、さて最後はどんな形でシメようか惑っていた。論文作成にいつも四苦八苦している我々に引き替え、ゴーストライターOK、場当たり公約当り前の世界に安住している政治家の面々は羨ましい限り…、と皮肉でも書いて日頃の鬱憤を晴らそうか、などとつまらぬことを考え始めたところへ例の STAP 細胞論文についての疑惑が報道され始めた。掲載された画像に加工された痕跡や使い回しの可能性があるというのが最初の指摘だったようで、これに対して共同研究者達はケアレスミスによる画像の誤掲載だったと火消しに努めていた。筆者はこの時点では、これぞ正に軽微なケアレスミスも侮ってはいけないことを暗示する好例と捉え、急遽この話題でシメようと思い直したのだが、その後の推移を窺っているうちに、ケアレスミスどころではない大騒動に発展してしまった。未だ決着に至らずの状況にあるようで、本エッセーも何とも締まりのないシメとなってしまった。ご容赦のほどを…。